滑稽本・人情本にあらわれた「ワタクシ・ワタシ・オレ・オイラ」と敬語表現体系

小島俊夫

一　論文の目標・方法・資料

この論文の目標は、十九世紀前半の江戸語の待遇表現体系を、第一人称代名詞[註1]の主述対応の点から明きらかにすることにある。

待遇表現は、階層・職業・年齢・性別・雰囲気などの制約のもとに、無限に流動する。今、ある人の心に、誰かを尊敬し、あるいは軽蔑する気持が仮にあるとしても、その二つの極は、連続的な移動である。無限に流動する待遇表現を明きらかにする一つの方法として、わたくしは、これまで、話し手が第二人称代名詞の素材を把握する際の、主述対応の形式を体系化してきた。その結果を足場として、さらに、第一人称代名詞の場合を調査し、それによって、その時代に幾通りの待遇表現上の言い方があったか、また個々の待遇語は、待遇表現体系全体のなかで、どんな位置を占めているかを、明きらかにしようとするのである。

第一人称代名詞の主述対応の待遇形式の図表を、第二人称代名詞のそれにならって分ける理由は、次の二点にある。

（1）第二人称代名詞のなす主述対応形式の方が、第一人称代名詞のそれよりも、多様な〈形〉をなす。第二人称代名詞の図式の方が、〈形〉で示しやすい。

（2）第二人称代名詞で素材を把握する場合の方が、第一人称代名詞で素材を把握する場合よりも、待遇語としての拘束を強く受ける。第二人称代名詞の図表の方が、待遇表現の〈内容〉を示しやすい。

第二人称代名詞の主述対応の待遇形式の図表を、左に示す。[註2]

段階 A	段階 B_1	段階 B_2	段階 C_1	段階 C_2	段階 D
上位の者に対する下位の者の最上級の畏敬。対等に相互に会話する場合は、最上級の教養・	聞き手に対する話し手の、礼を失しない範囲のくつろいだ畏敬。対等に相互に、中流の階	対等に相互に。	上位の者が下位の者に。	上位の話し手が下位の聞き手に対して、故意に尊敬語を用いて、話し手の尊大を誇示する。	卑罵

社交。	層が広く使用。				
あなた・あなたさま おまへ おまへさん・おまへさま おめへさん・おめへさま 貴殿〔武士〕	おまへ おめへ 貴殿〔武士〕	おまへ・おめへ 貴様・貴公 ぬし	てめへ・おのし こなた 貴様・貴公 そち〔武士〕	おまへ・おめへ	てめへ・うぬ おのれ・われ 貴様
お待ち遊ばせ。 お待ちなさいまし。 おつしやつてくださいまし。	待ちなされ。 (お)待ちなさい。 (待ちなさいまし。) お待ち(な)。(女)	待　つ。	待　つ。	待ちなさる。 お待ちだ。(女)	待ちやがる。 待ちをる。 待つてけつかる。
お待ち遊ばせ。 お待ちなさいまし。 おつしやつてくださいまし。	言ひなさる。 お言ひだ。(女)	言　ふ。	言　ふ。	言ひなさる。 お言ひだ。(女)	ぬかしをる。 ぬかす。ほざく。 言つてけつかる。
お待ち遊ばせ。 お待ちなさいまし。 おつしやつてくださいまし。	待ちなさる。 お待ちだ。(女)	待ちな。 待ちなせへ。 待ちねへ。 待たつし。	待て。 待つたりよ。 待つた。	待たつしやい。 待たつせへ。 待ちやれ。 待つてくりやれ。	待ちやがれ。 待て。 ぬかせ。 言へ。
おほせられます。 おつしやいます。					

この論文の資料は、次の通りである。

一八〇九　浮　世　風　呂（日本古典文学大系　岩波書店）
一八一一　浮　世　床（日本古典全書　朝日新聞社）
一八二〇　八　笑　人（日本名著全集）
一八三一　仮名文章娘節用（　〃　）
一八三二　春色梅児誉美（日本古典文学大系　岩波書店）
一八三三　恋の花染（人情本刊行会）
一八三七　いろは文庫（いてふ本三教書院）
一八三九　閑情末摘花（日本名著全集）
一八四一　春色梅見船（　〃　）
一八四三　夢酔独言（東洋文庫138　平凡社）
一八五二　春色連理の梅（人情本刊行会）
一八五七　七　偏　人（日本名著全集）
一八六〇　春色恋の染分解（人情本刊行会）
一八六六　花暦封じ文（　〃　）
一八六七　和英語林集成（復刻版　北辰社）
一八七三　会話篇（復刻版　東洋文庫）

ニ　ワタシ

（お俊）色絹さん、貴女は、誰が御最屓で御座いますえ。

（色絹）私は、さして贔屓と言ふはありません。何でも芸の付くのが宜いよ。お前は。

（お俊）私も、然様で御座います。

（色絹）夫れでもお前こそ、誰か好いた役者がありませう。

（お俊）イ、エ、ナニ、好いたなんぞと言ふは御座いませんが、何でも此方では、芝翫と関三がいツち宜う御座いますね。アノだんまりの所で、ソレ雷様か何かが、ドンと申すと、芝翫と関三が肝を潰して坐りますが、彼処が宜う御座いますねえ。彼の音では、誠に喫驚致しましたわ。

（色絹）オヤ、お前は、能く芝翫だの、関三だのと、役者の名を御存じだねえ。あア、知れた。アノ、絵草紙で御覧だね。道理だ。然様でなけりやア、どれが誰だか知んなさらう筈がない。

（恋の花染　第二回）

色絹（十六）は、裕福な商家の一人娘、お俊（十八）は、そのいとこであるが、女中同様に扱われる孤児である。[註3]二人の対話に見られる人称代名詞を対照させると、

色絹→お俊　オマヘ　ワタシ

お俊→色絹　アナタ　ワタクシ

のような組み合わせになる。

今、これを、左に掲げる用例の「オマヘ・ワタシ」と比較してみよう。

（▲）見なせへ。私が湯へ来るにも腰巾着だ。

（ゑご）さうさノウ。おめへがあんまり可愛がるからさ。いつそおめへの娘にしなせへ。

（▲）まさかそれも否だツサ。何でも朝むつくり起るから、晩まで私が内に居続だ。前生で何でかあつたらうよ。兎角くつついてゐたがる。

（ゑご）くつついて痛がる物なら、狼の生れがはりだらう。取付て離ねへなら狐さま。引付て離ねへなら石漆。もし煙草の脂なら乾ねへ内に味噌汁で洗ひなせへ。墨の付たのならお飯粒で、ヲツト、よかろ。

（▲）なる程おめへは気さくだよのう。おめへン所の旦那殿は、苦虫を食潰した様な貝をしてだんまり坊だに。夫に引替ておめへの又元気の能さとした事が。

（ゑご）似た者は夫婦といふが、わたしらが夫婦は鬼夫婦といふのだ。からツきりうら腹よ。見なせへわたし一人と家内中と掛合ふはな。（浮世風呂　三編巻之下）

ゑごは、「名代のひやうきん者とよばれしかみさま、浮世風呂とは一ツながやと見えて」と注記されているが、▲なる女性は不明である。二人の対話に見える人称代名詞を対照させると、

▲→ゑご　オメヘ　ワタシ

ゑご→▲　オメヘ　ワタシ

のような組み合わせになる。

さて、さきの色絹の例に見られる「ワタシ」と、この▲やゑごの例に見られる「ワタシ」とは、待遇表現上の性格が異なるように思われる。色絹の例に見られる「ワタシ」は、

オマヘ　御存じ（メ）だ。御覧だ。

知ん（り）なさる。

ゑごや▲の例に見られる「ワタシ」は、

オメへ＼可愛がる。
（マ）／気さくだ。（註4）

というぐあいに、第二人称代名詞であいてを把握する際の、主述対応の形式が異なっている。

わたくしは、待遇表現体系の上で、前者のような「オマ（メ）ヘ」を段階B_1、後者のような「オマ（メ）ヘ」を段階B_2と分類する。そこで、色絹の「ワタシ」の例を「第二人称代名詞の段階B_1」に該当する（と仮定される）「ワタシ」、ゑごや▲の「ワタシ」の例を「第二人称代名詞の段階B_2」に該当する（と仮定される）「ワタシ」として、区別したい。

第二人称代名詞の段階B_1に該当する「ワタシ」の例（男性）を、左にあげる。

（八笑人の一人→仲間の男の母親）
ヲオおつかアよくお出なすった。時に卒公此頃またづるけかへ、こまったもんだ。さうとはしらず、今日はわたしが余所へ茶ばんがあつて行やす所が、相手に女形が入用だゆゑ、だれを頼まうかとかんげへて見るに、おめへもしつての通り、わたしが内へ来る男に、女形を勤ようといふ首が壱ツもねへから、こまりきつて居たとこへ、久しぶりで夕ちよいとこつちへ卒公が見えたから、取あへず頼やしたが、さしたる用事でもなくば、おとつさんにいゝやうにいつて置て、わたしに今日一日かしてくんなさらねへか。（八笑人　三編追加上）

（浪人安蘇貝十郎左衛門→同藩の浪人の娘）
イヤそれやア無理な了簡だ、元来兄弟か夫婦ぢやアあるまいし、ふとした事から此様に心易くするさへ世間へ対して済まぬ仕義、殊にお前は小児の様に思つて、唯心ぼそいから私を長く留めたからうが、何とか他が思ふと始終お前の為にもならず、少しもはやく私は立退いて、お前は後の相談を誰ぞに頼んでしなさるがいゝではないか。（いろは文庫　第十回）

（裕福な商人〈若者〉→隣家の友人）
清さんお前も気の弱い。全体私の方へ内証で、実は這般くくいふ所に居ると、知らしてゞも呉なさりやア、今まで斯しても置ず、又些やそつとは貢も仕様し、何様か箇様か訳をつけて仕舞けれど、何をいふにも一向信なしといふもんだから、詮方がねへ。見りやア何だか寒さうな形だ。マアくく何にしろお前方の、居なさる所へ同伴に往う。

（友人→若者）
左様言てお呉なさると、叱られるより余程怨禍、実に吾儕が悪いから。（閑情末摘花　第十七回）

第二人称代名詞の段階B_2に該当する「ワタシ」の例（男性）を、左にあげる。

（湯屋の番頭→上方男けち助〈近隣〉）
けち助さん。大きな声だネヱ。私等が門首でどなる声が二三町は響けやせう。八百屋だらうが、前栽売だらうが、おめへにつかまつてはいかねへ。どうしても上方者は如在ねへぜ。人をばころりとさせるネ。（浮世風呂　四編巻之下）

（町人・男→町人・隠居・男）
ハイ、私どもが孝行は金の釜も掘ねへから、唐銅の釜を担て来る、醴でも呑せるくらゐな事さネ。（同　前編巻之上）

（むかしかたぎの律義おやじ→いさみ肌の男　回顧談）

今おめへ、敵役も実事師も出た所ではわからぬはさ。わたしらが若い時分は、敵役の面が藍隈とやらいつてネ、彼ソレ、隈ゑどりが。（同　四編巻之下）

以上の、二種類に分けられた「ワタシ」は、全くの対等、もしくは、表面的に対等をよそおう対等であった。しかるに、次に取りあげる「ワタシ」は、明きらかに下位の者に対して、上位の者が用いる「ワタシ」である。

（廿四五のよめらしき女。七十あまりのめくらばあさま、姑と見えて、法体したる人）

（嫁）サア〳〵、てうど能うございます。おまへさん、是をお浴遊してお上りあすばせ。

（姑）アイ〳〵。最うあがりましよ。今日はこなたが能く流して呉たでさっぱり仕ました。わたしは上るが、こなたはもつと這入るが能よ。

（嫁）イエ、もう、私もよろしうございます。

（姑）よいかへ。能温らぬと跡で寒いによ。私に構つて風を引てはならぬ。よいかエ。

（下女おやすも、このよめが、やしきづとめの頃より、部やがたにつとめたるが、）

（よめ）弥寿か。

（やす）ハイ。

（よめ）おのしはの、跡へ残つてゆるりと流してお出。わたしがお供するから能よ。（浮世風呂　二編巻之下）

右の例で、姑は嫁に、嫁は下女に、いずれも第一人称代名詞「ワタシ」を用い、しかも、おなじ場面のなかで、第二人称代名詞「コナタ・オノシ」を用いている。「コナタ・オノシ」は、いずれも、待遇語的に上位にある者が、下位にある者に対して用いるもの、わたくしの分類にしたがえば、第二人称代名詞の段階C_1である。ゆえに、右の用例のなかで用いられた「ワタシ」は、第二人称代名詞の段階C_1に該当する（と仮定される）。

要するに、「ワタシ」には、第二人称代名詞の段階B_1・B_2・C_1の三つに該当すると思われる三種類があることになる。

三　ワタクシ

第一人称代名詞「ワタクシ」の待遇語的性格は、第二人称代名詞の段階Aに該当する。つまり、一人の話し手が、自分を「ワタクシ」と把握する場面では、その話し手は、聞き手を「アナタ・アナタサマ・オマ（メ）ヘサン・オマ（メ）ヘサマ」と把握するのが原則である。下位の者が、上位の者に対して用いる場合は、最上級の畏敬を、対等の者相互に用いる場合は、最上級の教養・社交（の態度）を示す。その用例を、左にあげる。

ヘイイエ、毎度御屋敷さまの御恩と申、別して御ひいきくださいまする、榛沢さまなり尊君なり、此様な御用ぐらゐは、百分一にもたらぬお礼。それにつきましても、先達て御新造さまの、わたくしへ内〻仰聞られましたこと、貴君さまにも御召仕ひの女中に、御手をつけられましたことのござりまして、（春色梅児誉美第二十齣）

さア若殿様、お伏寝る時分には、私が取りに参りますから、お心置なうお暖り遊ばせ。（花暦封じ文　第二回）

ヘエ、それは、尾張町の平松の黒ぐすりでございませう。あれ

はよいお薬さ。熊の腹帯だの、子安のお守だの、お雛形だのとそれは〳〵有がたい品を方〴〵さまからお借申しました。私がたび〳〵産を致ても、子の産は何か案じられまして、気味のわるいものでございますよ。

その筈さ。おまへさん、お産れなすつたら、産湯を徳利に一盃おとりなすつて、胎衣と御一緒にお埋なさいまし。幼さまがお乳におこまりなさらぬといふお呪咀でございます。私どもは兎角に子育がなくてこまりますよ。ホンニお羨しい事だ。（浮世風呂　二編巻之上）

ヘイいへサそれを申に参りました故、まうすなとおつしやつても、申さねば相なりませぬ義、イエサ外の義でもござりませぬが、よい年を致してト思し召の程も、面目次第もござりませぬが、何れあなた方の愚案をおかり申さねば相成ませぬゆゑ、今日わざ〳〵。

……

モシ〳〵、貧兵衛さん、おまへさんも其様におかたく計りなさつては、かういふ相談は出来やせん。まづゆるりとお楽においでなさつて、お心安くおはなしなさらぬと、こいつらはみんな根が下主でございますから、〻気をつめてとんと相談に乗がきやせん。（八笑人　四編下の巻）

さて、最上級に折り目正しい待遇表現「ワタクシ」と、それに次いで、礼を失しない範囲で、ややくつろいだ待遇表現としての「ワタシ」（第二人称代名詞の段階B_1に該当する）とが、おなじ場面・文脈のなかで、微妙にゆれ動く待遇表現があり、すくなからず分布している。

（武士の内妻〈武家の娘・芸者〉――→夫）

ヲヤけしからねへ。わたくしよりあなたに似たら、親に世話ばかりやかせませう。

……

ヲヤよろしく申ておくんなさい。あなたこそわたしをお化しなすつたのでございます。（仮名文章娘節用　第五回）

（町人・男――→主家すじの町人・娘）

ヤレ〳〵そうでございましたか。御免なせへ。此間はチツト病気が。少し見申さねへうちに、大そううつくしくおなりなすつた。……時にマアどうして、わたくしどもへたづねてお出なさいました。今じやア何処にお居なさいますヱ。

……

ハアそして私に御用といふわけもあるめへが、それともなんぞ廊へ使にでも参るわけかネ。（春色梅児誉美　第二十三齣）

（町人――→町人）

それで悉皆分解りやした。時に与四さん、斯様なすツちやア如何でせう。爰にべん〳〵と引ツ込んでお出でなすツちやア、宝を詮議の手続きも遠いといふもの。いつそ私ども御一緒に鎌倉へお出でなすツて、暫く何所ぞに身を忍び、より〳〵茶入の穿鑿が、宜敷きやうに存じます。

……

夫れが宜う御座えやす。私が察するにやア、其の千葉様の御藩中に、猿坂とかいふ侍が、小万さんに篦棒とあつく成てゐるといふ事だが、若しや夫等の手続きか、又お宅の中に悪者のお心

当はありやせんか。（春色恋廼染分解　第十三回）

（清之助）ドレ私も帰りませう。

（遠世）　アレマア宜ぢやアございませんか。急に淋しくなりますから。モウ些お遊びなさいましナ。

（清）それでもお前さんと只両個ぢやア。

（遠）お否でございますかへ。

（清）ナニ左様ぢやアないけれど兄さんのお咄しで過日聞た事が有りますからサ。

……

（遠）清さんアノ女蝶男蝶の折形は、どふでございます子へ。

（清）御婚礼のお準備かへ。そりやアお前が折ずと済ませう。

（遠）アレ否な清さんだヨ。私が何時婚礼をいたしますヱ。

（清）何時だかしらないけれど、兄さんのお咄しで過日聞た事が有りますからサ。

（遠）何をお聞遊ばしたヱ。兄さんが何様なお咄しをいたしたか、左様言てお聞せなさいまし。

（清）どふして滅多にやア言れません。

（遠）アレサ清さん、其様になぶらずと被仰ましなねへ。私が何処ぞへ縁付とでも申ましたのかへ。（閑情末摘花　第四回）

清之助に対するおちせの待遇語的表現は、良家の子女らしい、折り目正しい言い方と、ややくつろいだ言い方のあいだを、微妙に行きつ戻りつしている。以上の例は、「ワタクシ」と「ワタシ」とが、その用法の差を互に縮めてゆく径路を暗示するのではないかと考えられる。[註5]（明治期の小説には、用法の差を依然とどめている。）

四　オレ・オイラ・オラ

第一人称代名詞「オレ・オイラ・オラ」は、対等の者相互に、あるいは、上位の者から下位の者へ、また、別の場合には、ののしる言い方としても、用いられる。それら三つの用法は、それぞれ、第二人称代名詞の段階B_2・C_1・Dに該当する（と仮定される）。

（寺子屋へ通う年齢のこどもたち）

（亀）ムヽ、おかたじけ。しんに這入な。後にの、おれが何にならア。仁木弾正でせり出しの所をするからの、幸さんは団十郎が男之助で、椽の下から出る所だア。おめへ其時、鼠になつて巻物を咥へて出さつし。

（勝）おいらはいや。夫じやア、幸さんに扇で打れるのだア。おいらアいやゝ。只這出してあたまをくらはされるばかりじア威勢がねへぜなア。

（亀）夫ならの、あのの、幸さんに踏られて居ながらの、ギツクリときめねへ。

（幸）私はいや。夫じやア私が男之助よりは鼠の方が強くなるものを。

（勝）そしておれもいやだ。おれが鼠でギツクリをすると、幸さんがあたまを痛く打だらう。（浮世風呂　前編巻之下）

（老婆二人）

さうさ。自由にならねへものよのう。おれが内じやア、おれが骸がきかねへから、守が一ツ出来ねへのに、年子だア。ホンニちつとおすわけしてへ位よ。先の娶が置て行た子が三人に、今度の嫁が続て二人。またおめへ出来そうだ。

……

ハテ、誰が贔屓をするものかナ。夫がおめへの愚痴だアな。お

らア女だけれども心は男のやうだから、愚痴なことは嫌だ。（同　二編巻之上）

（料理屋の女らしい者）

ホンニおめへのかゝさんはせじ者だのう。いつそ世事が能よ。おらが所のかゝさんと来ちやア、小ごとばアつかり云て、うるさくつてなるもんじやアねへ。（同　二編巻之上）

（鉄炮作とあだ名される男とその友人）

コウ〳〵、夫よりか、ぬしは雪女を見たか。

ウンニヤ。

おらア見たぜ。流石のおれも寒粟とした。

幽霊だの。（同　四編巻之上）

（八笑人のなかまどうし）

第一おめへたちに、切ツかけも稽古もいらねへから、まちげへがなくツていゝ、おれひとり狂言だ。（八笑人　三編の下）

こどもから老人まで、男も女も、用いる。同じ場面で、同じ話し手が用いる第二人称代名詞は、「おめへ・ぬし」（段階B_2）であって、親密で開放的な人間関係において、対等に用いられる。同じ話し手が同じ場面で、同じ聞き手に対して、「ワタシ」と「オレ・オイラ」とをマア〳〵諸事自己にまかして置きねへ。（閑情末摘花　第二十八回）

私だつて気にならねへ事はないが、どうも詮方がねへから、（同）

のように、併用する例は、珍しくない。

（町人・老人・男→町人・若者・男）

ハヽゝゝまだ〳〵合点が行まいテ。どうでおれがお談義は、しげ坊とやらの新内ぶしを聴くやうではないのさ。ハヽゝゝゝ。（浮世風呂　四編巻之上）

（母親↑→娘、十六七歳　対話）

誰だらう子。慈母さん私は一向聞なれない声だが、門イに出る児だと言て聞て居るヨ。

左様さノウ自己も知らない声だ。（閑情末摘花　第五回）

（武士→女中）

イヤコレお冬、今此身が言ふ口上を失念せず、たしかにお兄上さんのお帰りのとき申上げてくれ、屹度ぢやぞ。（いろは文庫　第十五回）

（武士→無礼ならず者）

ハヽハヽゝゝ、こりやこなたには酒が過ぎたな、余ほど機嫌と見えるワイ、何事も此身があやまり、往来中ゆゑ人も立つ、最う宜い程に了簡為やれ。（同　第三十六回）

（町士〈The traveller is an official of medium rank.〉→用人）

Sō sa. Mā ore ga noru hikido-kago it-chō, homma ip-piki, riōgake ni ka. Sono kurai no mon' da.

(KUAIWA HEN. EXERCISE XVII. 5.)

（用人〈武家〉→御引き）

Temei yado-hiki ka? Oira a itsumo Shimoda-ya é tomaru n' da kara ikenai. (KUAIWA HEN EXERCISE XVIII 62.)

以上の用例は、上位の者から下位の者へ用いられた例である。武士も町人も、用いる。武家の婦人の使用例は、未確認であるが、町人社会では、女も、用いる。第二人称代名詞「コナタ・temei テメ

へ」（段階C1）と、「オレ・オイラ」とを、おなじ話し手がおなじ場面で、用いている。[註7] これらの「オレ・オイラ」は、第二人称代名詞の段階C1に該当すると仮定される。[註6]

上位の話し手が下位の聞き手に対して、自己の尊大を誇示する言い方（第二人称代名詞の段階C2）は、第一人称代名詞の場合には、第二人称代名詞の場合と違つて、主述の形式にそれが表われない。種々の見解が予想されるので、他日を期して、結論を保留させていただく。

（座頭・盲→座頭・盲）

ヤ、こいつは、わが方からぶつつけておいて、おれがいふ事を先へぬかしおる。おのれこそ明盲だはい。（浮世風呂　前編巻之下）

（ならず者→武士）

ヤイ二本坊めえ、此広い大道を明盲ぢやアあるめえし、何で此身に突当りやアがった。（いろは文庫　第三十六回）

（母親→自分の子）

うぬも又、うぬだは。あいつらに泣せられることがあるもんか。益にたゝねへ。なぜ向の面でもおもふさま引掻むしつて遣ねへ。ソシテ、まア、いけ外聞の悪い、湯屋まで泣てうせることがあるもんか。能、〳〵、待居ろ。今おれが連居て、あの親めらに誤らして呉う。（浮世風呂　二編巻之下）

右の用例の「オレ」は、第二人称代名詞「オノレ・ウヌ」（段階D）と同じ場面に用いられ、卑罵の表現に第一人称代名詞として加担している。第二人称代名詞の段階Dに該当すると仮定される。

五　ワツチ　ワシ

（八笑人の一人→遊びなかま）

おめへ左様いふけれども、今まで皆が随分面白い趣向をしたけれど、いつでもやんやと仕舞まで見せた事はなからう。斯ういつちやアをかしいが、わつちが茶番ばつかりは、乍憚始終やんやとやつて見せよう、細工は流々仕上を御覧じろ。

……

がうぎと腐すノいゝわへよしねへ。筋がわからうがわかるめへが、其所ア阿波さん江戸ツ子だ。時は橋の鯱を横目に白眼で、澗田上水を産湯につかつた男だ、地鉄が違はア皆なが不承知なら、おれ独りで為るはエ、へちむくりめら。

……

さう左次さんの様にいはれちやア、わつちが何か腹を立て、野暮を言つた様で、今更恥かしい訳だ。中直りにちよつぴり、潮酢のものを私ちが奢らう。（八笑人　五編中の巻）

（町人社会の子もりをんな→同乳母）

おん乳母どん。その跡で、わつちの襟を剃つておくれナ。

……

コウ、御乳母どん。剃らずは剃らねへで済はナ。なにもそんなに棚卸をするにはおよばねへヨ。わつちが天窓が昆布に油揚なら、雲脂の溜ツたおめへの天窓は、鼠尾藻の白和だ。なるほどあなたさまはお美い。

……

覚えて居ねへで、そんならなぜおれがことを悪く云ツた。（浮

世風呂　二編巻之下）

右の用例に見られる「ワツチ」は、第二人称代名詞の段階B_2「オメヘ」と同じ場面・文脈のなかで用いられている。男も女も、親密で開放的な人間関係のなかで、用いる。

しかるに、次の用例に見られる「ワツチ」は、第二人称代名詞の段階B_1に該当すると考えられる。

（八百屋・行商・男――→客・町人・男）

アイ。わつちかヱ。……何を上やす。生姜かヱ。こりやアおめへ、大束だア。大束がなんなら、此下に小束もありやす。皆おめへ、撰だア。孰にしなさる。（浮世風呂　四編巻之中）

（としのころ十か十一ばかりの小娘こましやくれた形にて二人）

ほんにかへ。わつちのおツかさんは何でも知てお出だから、些でも三絃の弾様が違ふと直にお叱りだよ。わたしのおツかさんは七の歳に、踊でお屋敷へお上りだと。……おまへもお仕か。（同三編巻之上）

第一人称代名詞「ワシ」について、池上秋彦氏は、「かなり四角ばった感じをもっているようである」と述べておられる。(註8) わたくしも同感であるが、次の例は、気がかりな例である。

（湯屋の番頭――→立腹している女客）

モシ、おかみさん、私が拭てあげませう。私は是でもね、むかし風の狂哥が大好さ。しかも一風斎の弟子で、一風呂斎と申ます。私は御高名を承知だが他はしらねへ。惜い時止ました。今だと判者になって、翌から一風呂斎大人といはれるのだけれど。（浮世風呂　三編巻之上）

右の場面は、柄のわるい、いさみ肌の女客の立腹を、湯屋の番頭が、いっしょうけんめいに取りなしているのである。四角ばったりなんか、できない事情である。番頭は、他の箇所では、もう一箇所「ワシ」を用いているほかは、「ワタクシ・ワタシ」を用いている。

（中間――→主人〈武士〉）

跡から遅れて只一人、大鷲文吾さまが鎗を杖にしてお出でなさりました故、小山田様はと聞きましたら、いつも下々へやさしい旦那、私をごらうじて、（いろは文庫　第一回）

中間が主人に向かって、「ワシ」という言い方をするのは、気がかりな用例である。他日に期することにさせていただきたい。

六　むすび

後期江戸語における第一人称代名詞の待遇表現については、すでに、小松寿雄氏が「人情本の待遇表現」（国語と国文学　昭36・4）において、次のような図を用いて、説明しておられる。

概念図1　町人の男

	第三段階	第二段階	第一段階	
人称	ワタクシ アナタ オマヘサン	ワタシ オマヘ	オレ・オイラ	
命令表現	……マシ	オ…ナサイ	……ナ	普通動詞
		オ……（ナ）	……ネヘ	
	オ…ナセヘ		……ナセヘ	命令形
			……ヤレ	
			……ヤ	
			……ツシ	
			……サツシ	

否定	……マシナ			
マス	「マス」べたつき	オ…デナイ	…ナサンナ	普通動詞ナ
	「マス」あり		「マス」なし	

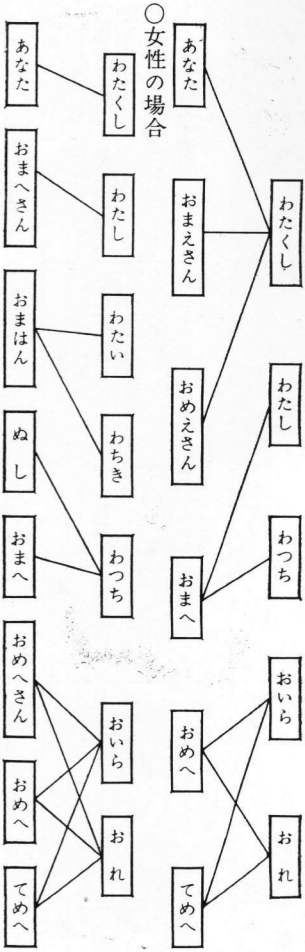
概念図Ⅱ　町人の女

第三段階	第二段階	第一段階
ワタクシ	ワタシ・ワタイ（オレ・オイラ）	
アナタ・オマヘサマ	オマヘ　（オメヘ・テメヘ）	

概念図Ⅲ　芸妓

第二段階	
ワチキ	ワタイ
オマハン	オマヘ

○男性の場合



○女性の場合

小松寿雄氏は、右の図を示すにあたり、「人情本の待遇表現は細分しようとするならば、もっともっとこまかくすることができる。どのくらいできるかちょっと見当もつかないくらいで、要するに数枚の図表だけで全貌を説きおおせるものではない。」と述べておられる。同感である。すくなくとも、わたくしにとって、図表をつくる意義は、研究の方法（手段）であって、目的ではない。こまか過ぎる図表も、おおまか過ぎる図表も、用をなさない。

また、池上秋彦氏は、「人情本に現われた一・二人称代名詞㈠」（鶴見女子大学紀要　昭39・12）において、結論の項に、次のような図を示しておられる。

さて、わたくしの作った図は、小松寿雄氏の図よりも、やや細分化している。その概略を、左に示す。

	第一人称代名詞		第二人称代名詞	
			段階 A	
Ⅰ	ワタクシ	お待ち申し上げます。 待たせていただきます。 お待ちいたします。 申し上げます。	あなた・あなたさま おまへさん・おまへさま おめへさん・おめへさま 貴殿〔武士〕	お待ち遊ばします。 お待ちなさいます。 （お待ちになります。）
			段階 B_1	
Ⅱ	ワタシ ワツチ	同上。 待ちます。 言ひます。	おまへ おめへ 貴殿〔武士〕	待ちなさる。 （お待ちなさる。） お待ちだ。〔女〕
			段階 B_2	
Ⅲ	ワタシ オレ オイラ ワツチ ワシ	待つ。 言ふ。	おまへ・おめへ 貴様・貴公 ぬし	待つ。
			段階 C_1	
Ⅳ	ワタシ オレ オイラ ワシ	待つ。 言ふ。	てめへ おのし こなた 貴殿・貴公	待つ。
			段階 C_2	
Ⅴ	（保留） （保留） （ワタクシ・ワタシ）	待つ。 言ふ。 （待たせていただきます。待ちます。）	おまへ おめへ	待ちなさる。 （お待ちなさる。） お待ちだ。〔女〕
			段階 D	
Ⅵ	オレ オイラ	待つ。 言ふ。	てめへ うぬ おのれ われ 貴様	待ちをる。 待ちやがる。 待つてけつかる。

言ひなさる。
お言ひだ。〔女〕

言ひなさる。
お言ひだ。〔女〕

おほせられます。
おつしやいます。

ぬかしをる。
ぬかす。ほざく。
言つてけつかる。

第二人称代名詞						
おまちなさいまし。 おつしやつてくださいまし。 おまち遊ばせ。	待ちなされ。 待ちなさい。 おまち（な）。〔女〕	待ちな。 待ちねへ。 待ちなせへ。 待たつし。	待て。 待つたりよ。 待つた！	待たつしやい。 待たつせへ。 待ちやれ。 待つてくりやれ。	待ちやがれ。 待て。 ぬかせ。	

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ欄の第一人称代名詞群は、それぞれ、（さきに、わたくしの作った）第二人称代名詞の段階A・B_1・B_2・C_1・C_2・Dに該当すると仮定される。

（註1）武士の「拙者・身共」等についても論ずべきであるが、用例が乏しいので、本稿では触れない。

ヘイ、イエ拙者は御存じの通り未だ妻と申すものは持ちませぬが、何ゆゑ左様に、（いろは文庫　第四回）

身共も彼様なむさくろしい奴等の中に居やうより、速かに上陸いたさうと存ずるが、ひゞりがきれて動かれまうさぬ。（七偏人　二編巻之中）

（註2）小島俊夫「後期江戸語における対称代名詞と待遇表現」国語（東教大）昭32・9

（註3）下女はお俊に対して、

お俊さん、是れをお上りなさいまし。（恋の花染　第二回）

という言い方をしている。主人に対する言い方に近い。

（註4）「見なせへ・しなせへ」命令表現は別。第二人称代名詞の図表を参照。平叙文の場合より、一段上の言い方に相当。

（註5）小島俊夫「アナタ・オ前サン・オ前」言語と文芸　昭41・11

（註6）用人が temei などというと、現代では、柄がわるいが、武士である。

Shikashi sessha wa sukoshi mochiiru kara nō,……

（KUAIWA HEN EXERCISE XVII. 30.）

自分を（拙者）といっている。なお、「てめへ」の用法については、前掲「後期江戸語における対称代名詞と待遇表現」国語昭32・9　参照。

（註7）「オレサマ」という言い方については、用例が乏しいので、触れられない。

サア、どいつでもおれ様が対人だぞ。（浮世風呂　四編巻之下）

二人ながらおれが対手だぞ。（同　前編巻之下）

右二例は、同一人物のことば。

古風なよふだがくりからの、竜吉ざんたアおれさまのことだ。（春色梅児誉美　第四齣）

（註8）「人情本に現われた一・二人称代名詞について㈠」鶴見女子大学紀要　昭38・11

（参考）

	閑情末摘花			浮世風呂		
段階	第一人称代名詞	男	女	第一人称代名詞	男	女
Ⅰ	ワタクシ	2	10	ワタクシ	6	20
Ⅱ	ワタシ	12	6	ワタシ	3	1
	ワツチ	1	0			
	ワタイ	0	2	ワツチ	4	0
	アタイ	0	1			
	ワチキ	0	2	ワシ	1	0
Ⅲ	ワタシ	4	1	ワタシ	4	21
	ワツチ	1	0	ワツチ	2	9
	ワシ	0	0	ワシ	1	0
	オレ	3	0	オレ	15	10
	オイラ	7	0	オイラ	9	10
	ワチキ	0	4			
Ⅳ	ワタシ	5	4	ワタシ	0	3
	ワシ	5	0	ワシ	3	0
	オレ	3	0	オレ	5	2
	オイラ	2	1	オイラ	0	0
	ワチキ	0	1			
Ⅴ	（保留）			（保留）		
Ⅵ	オレ	1	0	オレ	2	1
	オレサマ	0	0	オレサマ	2	0
	オイラ	0	0	オイラ	0	0

数字は、話し手と聞き手との組み合わせを示す。語の使用回数ではない。「オラ」を除く。浮世風呂では、男と男、女と女、しかも類似の階層間の会話がほとんど全部である。したがって、対等の言い方が多い。閑情末摘花では、対等の言い方をする女の作中人物が少ない。浮世風呂では、作中人物の出入りが多い。閑情末摘花では、少ない。作品の性格の相違が、数字の相違となっている。にもかかわらず、おおむねの傾向をつかむことができよう。

―山形大学講師―